

# 『理想の夫』におけるワイルドのアイランド性

河 口 和 子

オスカー・ワイルドは、Oscar Fingal O'Flahertie Wills Wilde という長いフルネームの示すとおり、アイランド人の作家である。しかし、最近まで、彼の作品が、アイランド文学として取り扱われる事や、まして、彼のアイランド性を取り上げられる事は、少なかった。アイランド文芸復興で活躍したイエイツ (W. B. Yeats)、シング (J. M. Synge)、オケイシー (Sean O'Casey) 等の作家に比べ、ワイルドは、彼のアイランド的要素を明確に示していないからだ。まず、ワイルドは、アイランドを離れてイギリスで作家活動を行い、イエイツ等と共に直接アイランド文芸復興運動にかかわったわけではない。次に、祖国を離れても、ある特殊な思いを込めて祖国の事を綴ったジョイス (James Joyce) 等とも違い、ワイルドは、彼の作品においてはほとんどアイランドには触れず、常に中心はイギリスであった。例えば、商業的大成功を収め、ワイルドの名を世に知らしめた一連の喜劇では、舞台は、ヴィクトリア朝の英国上流社会、そして、登場人物たちは、上流階級の人々が描かれている。

しかし、ワイルドは、愛国心豊かな両親の間で幼少時代を過ごし、多分にその両親の影響を受けていた。そして、20歳でオックスフォード大学へ入学するため、イギリスに渡った時から、彼の中に秘めていたアイランド性をさらに強く意識するようになり、生涯を閉じるまで、アイランドと強い繋がりを持つ。そして、このワイルドの意識は、作品に大きく影響しているのである。

ワイルドは、アイランド独立運動が高揚する1854年、ケルト文化の漂うアイランド人家庭の中に生まれた。ワイルドの父は、医者でありながら、アイランドの考古学や古美術の面においても業績を残し、母は、スペランザというペンネームで、「愛国運動のシンボル」又は、アイランドの「ジャンヌ・ダーク」<sup>1</sup>として、作家活動をしていた。当時、アイランドの人々は、イギリスの圧政に加え、ジャガイモの大飢饉にもあい、苦しみ果てていた。彼女の詩は、その民衆の気持ちを捕らえ、また、彼女の存在は、民衆が独立運動に立ち上がるために必要としていたアイランドの女神モリガンの姿と重なり合うのである。ワイルドは、彼女から受け継いだ文才以外に、服装などで異彩を放っていた事、生活の実際面に無関心な事など、あらゆる面で母親との接点が浮かび上がる息子である。

Declan Kiberd は、ワイルドの女性観を次のように指摘する。

He [Wilde] had seen in his mother a woman who could edit journals and mount political campaigns as well as any man ; and it was from her that he inherited a lifelong commitment to feminism.<sup>2</sup>

Kiberd が示しているように、ワイルドは、nationalist かつ feminist としての母親も意識していた。特に、ワイルドの喜劇において、女性がうまく描かれており、ワイルド自身が女性に共感する部分が随所に見られるのは、このような母親の影響によるところが大きいと思われる。

一方、ワイルドの喜劇の背景にもなっている19世紀末ヴィクトリア朝時代の英国は、アイルランドとは全く異なった社会であった。イギリスは、帝国主義をますます押し進め、世界各地に領土を広げ、その勢いはとどまることを知らないほどであった。同時に、イギリス国内へは、海外から、あらゆる思想とともに、多くの文学作品や外国人が入ってきており、価値観の混乱もきたしていた。ワイルドの喜劇の中で取り扱われているピューリタンの思想もそのうちの一つである。

ワイルドは、この風潮の中で、次の二つの変化に興味を示した。一つは、ブルジョアジーの台頭で、もう一つは、新しい女性の台頭である。中産階級の人々は、大英帝国の経済力の発達とともに、多大な富を貯えるとともに、政治力を増していき、貴族だけの世界であった社交界にも顔を出すほど社会的発言権を持ちはじめた。また、今まで家の中で、父や夫に従順なだけであった女性も、社会的地位が増し、少しずつ社会の前面に出るようになった。

ワイルドが、何故、これらの社会的弱者に興味を持ち、積極的に作品の中に取り上げてきたのかという疑問も、やはり、彼のアイルランド性というところにいきつくと思われる。二項対立の図式を取るならば、帝国主義を世界各地に押し進めるイギリス対、植民地アイルランドの力関係は、まさに、社会的強者である男性に対して、常に抑圧され続けた社会的弱者である女性の力関係に当てはめる事ができるのである。この事を踏まえ、ワイルドの作品中の女性を検証する事によって、彼のアイルランド性が浮き彫りになってくるのではないか。本論では、ワイルドの四喜劇のうち、『理想の夫』(An Ideal Husband, 1895)を取り上げ、作品の中に隠されたワイルドの声を探求していきたい。

『理想の夫』は、前二作品『ウィングミア卿夫人の扇』(Lady Windermere's Fan, 1892)、『何でもない女』(A Woman of No Importance, 1893)と、状況設定、登場人物、時代背景等多くの点において共通性が見られる。また、プロットの展開に大きな役割を果たす小道具も、『ウィングミア卿夫人の扇』では扇子だったのが、今回は手紙とブローチになっただけである。しかし、家庭内の道德問題を背景とする前二作品と異なり、今回は、アルゼンチン運河を取り巻く政治的陰謀が絡み、社会性が増すとともにスリルとサスペンスを帯びた筋立てになっている。ワイルドの喜劇三作品には、あらゆるタイプの女性が登場するが、共通して出てくるのが、ピューリタンの思想を持ってそれを体現している女性と、ダンディーの女性版、そして、俗物性に満ちた女性である。ワイルドは、これらの女性を通して自分自身を表現していったと考えられる。

まず、ピューリタンの女性に注目してみよう。『理想の夫』中の、ギリシャ彫刻のような面立ちのチルターン卿夫人(Lady Chiltern)は、ウィングミア卿夫人(Lady Windermere)と同様、偏狭で潔癖なピューリタンの思想の持ち主である。もっとも顕著に彼女の性格を表している個所は、第一幕の終わり、サー・ロバート・チルターン(Sir Robert Chiltern)とチルターン卿夫人との会話中にある。サー・ロバート・チルターンが、アルゼンチン運河構想に反対の意見書を国会に提出しようとしていた矢先に、株式投資で利益を上げようとしているチェヴリー夫人(Mrs. Cheveley)が現れ、彼の暗い過去の事実を握っている事を理由に、その意見書を撤回するよう脅しにかかる。結論に迷ったサー・ロバート・チルターンは、妻のピューリタンの性格を知りつつも、遠回しに、過去の罪に対する彼女の態度を伺う。

Sir Robert Chiltern : . . . No one should be entirely judged by their past.

Lady Chiltern : One's past is what one is. It is the only way by which people should be judged.

Sir Robert Chiltern : That is hard saying, Gertrude!

Lady Chiltern : It is a true saying, Robert.<sup>3</sup>

この会話で、チルターン卿夫人は、一度過去に犯した過ちは、決して許される事はない、過去は、現在のその人自身を表しているようなものだからと述べている。そこで、彼女の決して妥協を許さない偏狭なものの考え方が明らかになってくる。それは、ウィンダムミア卿夫人の物事を全て白黒はっきり分けてしまう厳格な態度とちょうど同じである。

同様に、夫に対するチルターン卿夫人の愛も利己的で、一方的であるといえる。特に、彼女が危機に直面した時に、この事が明らかにされる。“I will love you always, because you will always be worthy of love.”<sup>4</sup> チルターン卿夫人は、夫は愛に価するから愛するのであって、決して夫の弱さや弱点を受け入れようとはしない厳格な態度を取り続ける。彼女が愛しているのは、彼女が作り上げた理想の夫に過ぎない。よって、彼女の愛は、もし、作り上げられた理想が崩れるのであれば、そこに成立していた愛も崩れ去ってしまうほど、薄っぺらなものなのである。

サー・ロバート・チルターンは、妻の態度とチェヴリー夫人の強迫との狭間で苦しむが、実は彼自身もたいして彼女らと変わりはない。俗悪な方法で富と地位を築きあげたにもかかわらず、チャリティーでその償いは済ませたと思ひ、その地位と名声が失われようとした時、不安になり、慌てているのだから。結局、彼は人間性や愛の真価を理解できない俗物なのだ。

ワイルドは、この作品の中で、多くの社会批判をしているが、ヴィクトリア社会の因習に縛られている偏狭で融通の聞かない厳格なピューリタンの思想を持つ人物を登場させる事によって、単純で画一的な価値観に対して痛烈な批判をしている。

一方、チェヴリー夫人は、チルターン卿夫人とは正反対に、異国情緒を漂わせ、また、悪のイメージで登場する。初め、彼女は、サー・ロバート・チルターンを恐喝し、続いてゴーリング子爵 (Lord Goring) の部屋では、手紙を盗み、その上、以前にブローチも盗んだ事まで明らかになっていく。一方で、彼女は、社交界や上流階級の人々の痛烈な批判を行う。彼女は、諸外国ではもはや時代遅れなものにもかかわらず、イギリスではもてはやされている、チルターン卿夫人の様な偽善的で一面的な考え方をするピューリタンが大嫌いである。そこで、彼女は、ピューリタンのみならず、崩壊しつつある英国社会を、真っ向から批判するのである。

外国から来た彼女は、英国全体を客観的に見る事が出来る。ちょうど、アイルランド人であるワイルドが、イギリスを見るように。しかし、彼女が、悪女であるがゆえに、観客は彼女に共感せず、その批判は、痛烈で、直接的であるにもかかわらず、観客は彼女の批判には注目しない。そこがワイルドの狙いであった。

ワイルドは、ブルジョア出身のチェヴリー夫人を登場させ、彼女に社交界の覗き見的役割を担わしているのである。つまり、中産階級の台頭とともに、今まで、上流階級の人々だけの世界であった社交界にブルジョアジーが参加する事が可能となる。劇の中で、ブルジョアジーの代表であるチェヴリー夫人が社交界に登場する事によって、一般の観客に、あたかも自分がそこに存在しているかのように錯覚させ、彼女を通して、貴族の生活を垣間見させる。そして、ワイルドは、上流階級の人々が、特別なでも優れているのでもないことを目撃させ、一般の人々に、自分たちとは何も変わらないという安心感と、さらには、偽善的でくだらないという感情をも抱かせるのである。

もう一人、この劇で重要な役割を果たしているのが、メイベル・チルターン (Mabel

Chiltern) である。メイベルは、三タイプの女性中、ピューリタンの思想を持つ女性でも、俗物性に満ちた女性でもない。彼女は、ヴィクトリア社会の因習から、全く解き離たれている。また、彼女は、人間性や愛の本質を良く理解しており、ヒューマニスティックな面を備えている。つまり、彼女は、ダンディーであるゴーリング子爵とともに、俗物によって作り上げられた偽善的な道徳に反発し、常にその規範外に存在する人物なのである。こういった意味で、チルターン卿夫人やチェヴリー夫人とは全く違う、メイベルの女性版ダンディーという新しい女性像が浮かび上がる。山田勝は、ダンディーについて次のように述べている。

ダンディーの心の奥底には、自分の生きている社会への不満と反逆、それに、時代の人々に対する軽蔑の念が常に存在する。<sup>5</sup>

ゴーリング子爵は、持ち前の巧みな会話で人々を魅了し、軽快なウィットで、社会批判を行ってきた。そして、サー・ロバート・チルターンの危機を救うのに、一役かった彼ではあったが、ゴーリング子爵がメイベルに求婚する場面では、明らかに女性ダンディーは、男性ダンディーより優勢の感がある。

Lord Goring : . . . I love you.

Mabel Chiltern : I know. And I think you might have mentioned it before. I am sure I have given you heaps of opportunities.

Lord Goring : Mabel, do be serious. Please be serious.

Mabel Chiltern : Ah! that is the sort of thing a man always says to a girl before he has been married to her. He never says it afterwards.

Lord Goring (taking hold of her hand) : Mabel, I have told you that I love you. Can't you love me a little in return? <sup>6</sup>

このようにメイベルは、ヴィクトリア朝的道德観から見て、不真面目と見られるゴーリング子爵に、真面目になってくれとまで言わせているのである。また、ゴーリング子爵は、自分の愛に対する見返りまでも彼女に求めていた事を、彼女に思い知らされる。つまり、彼女のダンディーぶりに、ゴーリング子爵は感服し降伏してしまっていると言えよう。

ゴーリング子爵とメイベル・チルターンというダンディーのカップルは、チルターン卿夫人とサー・ロバート・チルターンという俗物カップルと並行して存在する。世紀末英国のピューリタンの思想が氾濫する風潮のなかで、メイベル・チルターンは、時代に逆行していると自覚しつつもダンディーの本質を理解している女性である。キャヴァーシャム伯爵 (Lord Caversham) が、息子であるゴーリング子爵を揶揄する場面で、メイベルは、“Why do you call Lord Goring good-for-nothing?” <sup>7</sup> と反論し、ゴーリング子爵の特質を高く評価し、社交界の俗物とは區別して彼を見ている。メイベルは、また、キャヴァーシャム伯爵に、“An Ideal husband! Oh, I don't think I should like that. It sounds like something in the next world.” <sup>8</sup> と言いつつ。彼女は、チルターン卿夫人のような理想の夫を掲げる一般的な妻ではなく、本当の意味での妻になりたいのである。よって、『何でもない女』中の女性ダンディー、アロンビー夫人 (Mrs. Allonby) の考え方と同様、彼女にとって、理想の夫など存在しない。

R. D. McGhee は、このカップルと俗物のチルターン夫妻とを対照させ、次のように述べる。

With the promise of marriage between Lord Goring and Miss Mabel Chiltern, Wilde for the first time in his comic dramas brings forward a marriage of intellectual liberation . . . the Chilterns show us a marriage proper to the sphere of ethics, while Lord Goring and Mabel Chiltern show us the hope for a marriage proper to the sphere of art.<sup>9</sup>

チルターン夫妻と、ゴーリング子爵とメイベルの二組のカップルは、全く正反対に位置する。チルターン卿夫人のサー・ロバート・チルターンに対する愛は、倫理的高潔がベースになっているのに対し、メイベル・チルターンは、ゴーリング子爵の欠点をも含めた彼自身の性格に惹かれている。二組のカップルの結婚に対する考え方には、大きな差がある。ワイルドは、この二組を鋭く対照させる事によって、俗物たちの偽善的で中身の無い結婚を真っ向から批判するのである。また、Katharine. Worth は、このダンディーのカップルについて、次のように述べている。

We may see this couple as embodying Wilde's ideas on how to live life for the best. In this play, for the first time, the philosophy of love and tolerance is realised, through a witty, not a tragic figure.<sup>10</sup>

Worth が指摘するとおり、このダンディーのカップルは、ワイルドの愛の哲学を体現している。愛は、俗物のカップルが示すような表面的で偽善的なものではなく、ヒューマニズムに基づくものであると、ワイルドが主張しているのは明らかである。言葉を変えれば、メイベルは、ヴィクトリア朝時代、家父長制の社会の中で夫や父に従順な良き妻、良き母親、良き娘だけの女性像を覆す New Woman なのである。ワイルドは、社会的弱者であった女性に少なからず共感し、メイベルのような New Woman を作品の中に積極的に取り入れた。そして、New Woman の放つ軽妙なウィットが皆の注目を浴び、男性社会で、主導権を握るのを快く眺めていたのである。

しかし、ワイルドが、アイルランド的素質をもち、これほどまでイギリス社会とその人々を批判しているにもかかわらず、何故、彼は故郷を出てアイリッシュ海峡で隔てられた隣国の地へ赴き、アイルランド的でない作品を書き続けたのだろうか。

ワイルドは、異国の地に住み、イギリス人よりもっとイギリス的になる事によって、自分の中にあったアイルランド的要素を再発見できる事に気づいたのではないか。まず、ワイルドは、喜劇に、ゴールドスミス (Oliver Goldsmith) やシェリダン (Richard Brinsley Sheridan) の時代に花開いた英国伝統の風習喜劇 (Comedy of Manners) の形式を取ることにした。風習喜劇は、*The Concise Oxford Dictionary of Literary Terms* では、次のように定義付けられている。

[Comedy of Manners is] a kind of comedy representing the complex and sophisticated code of behaviour current in fashionable circles of society, where appearances count far more than true moral character.<sup>11</sup>

ワイルドは、この定義どおり、彼の喜劇の中で、ヴィクトリア朝の社会とそこにおける上流階級の人々を描いた。このように英国伝統の風習喜劇の手法を使い、当時の社会とその人々を描くという事は、作品自体に、現実感を与えることになり、また、観客もそれに興味を示すのだ。ワイルドは、この手法を使う事によって、作品自体に普遍性を帯びさせ、より多くの人々の注目を浴びる事を選んだのだ。

ショー (G. B. Shaw) が、『理想の夫』の劇評の中で、次のように述べている。

In a certain sense Mr. Wilde is to me our only thorough playwright. He plays with everything : with wit, with philosophy, with drama, with actors and audience, with the whole theatre.<sup>12</sup>

同郷人であり、ライバルであったショーは、この文中では、この劇に関してあまり高い評価を下していない。しかし、彼は、ワイルドのウィットの才能に対しては、十分な評価をしている。まさに、ワイルドは、この風習喜劇で自分自身を表現し、持ち前の秀でた才能を発揮する事が出来たのである。

ワイルドの作品には、多くの批判が内在しているのだが、ウィットに富んだ台詞、警句、アイロニーやユーモアを生む知性によって、イギリス人の観客を自在に操り、その辛辣な批判も笑いの中に受容させている。ワイルドは、自らの知性で、英国を笑い飛ばし、全てが彼の意図している方へ進んでいくのを快く眺めていたのである。

また、ワイルドのウィットは、アイルランド特有のものだった。“Their Irish Upbringing or heritage undoubtedly fostered their special gift for wit, . . .”<sup>13</sup>と表現されているように、ワイルドが、イギリスに移り住むまで過ごしたアイルランドの環境は、彼が作品を書く上で重要な役割を果たしている。同じ風習喜劇で成功したゴールドスマスやシェリダンもアイルランド人であったという事実も、同時に説明が付く。

次に、ワイルドは、イギリス社会におけるうわべだけで中身の無い、形式主義に疑問を持ち、ヒューマニティーにもう少し深い意味で注目する。ヒューマニティーというものは、一面性だけで判断され、また、何事もそれだけで解決できるほど単純ではないということをワイルドは主張し続けた。ステレオタイプのものの見方、さらに具体的には、アイルランド人を酒飲みで、愚弄で、粗野な人種とレッテルを貼り、型にはまった見方をしたイギリス人による Stage Irishman という偏見に満ちたラベル貼りに、ワイルドは、猛烈に反発している。Kiberd はワイルドの二面性について、次の様に述べている。

The man who believed that a truth in art is that whose opposite is also true was quick to point out that every good man has an element of the woman in him, just as every sensitive Irishman must have a secret Englishman within himself – and vice-versa. With his sharp intelligence, Wilde saw that the image of the stage Irishman tells us far more about English fears than Irish realities,<sup>14</sup>

Kiberd は、このように、一方が真実であるならば、逆も同様の事が言えると指摘している。男性に必ずしも男らしいと言われている精神的強さ、聡明ですばやい行動力や知性だけが備わって

いるとは限らない。男性にも、女性的だと言われ、否定されてきた、繊細さ、感情的な部分や内面の弱さも同時にある。また、アイルランド人は、愚弄で粗野な Stage Irishman のイメージだけで片付くような単純で画一的な人種ではない。アイルランド人もまた、隠されたイギリス的な部分も持ち合わせているのである。ワイルドは、Stage Irishman のようなステレオタイプの物の見方に批判の矢を向けるとともに、人間性と言うものは、あらゆる性質が内在し、複雑に絡み合い、形成されているものであると主張している。この逆説がワイルドの作品をうまく引き立たせ、一方を示すと同時にその逆の事もまた示唆している事に観客は気づくのである。

既に見てきたように、ワイルドの喜劇の中には、あらゆる女性が登場するが、アイルランドがイギリス帝国主義のもたらす犠牲者であるように、ワイルドは、女性をヴィクトリア社会の犠牲者として捉えている。例えば、作品中のピューリタンの思想を持つ女性は、ヴィクトリア社会の因習に縛られ、行動や思想においても抑圧されている。彼女らは、時代が生んだ産物で、偏狭で厳格な心の持ち主であり、特に、罪には厳しい目を向ける。過去を持つ女性には、この社会は風当たりが強く、『何でもない女』のアーバスノット夫人 (Mrs. Arbuthnot) のように、過去に罪を犯したものは、一生日陰で暮らさなくてはならない。ワイルドは、権力による弱者の抑圧に対し嫌悪を示し、逆に、社会の因習にとらわれない New Women を作品中に登場させ、彼女たちを使って、ヴィクトリア道徳理念を覆すとともに、型にはまったものの考え方の撤回を示唆した。また、New Women が男性社会を牛耳るのを描くと同時に、アイルランドにも同様な願いが込められていたのかもしれない。

ショーは、ワイルド劇中のイギリスとアイルランドをさらに分析する。

Ireland is of all countries the most foreign to England, and that to the Irishman . . . there is nothing in the world quite so exquisitely comic as an Englishman's seriousness.<sup>15</sup>

このように、アイルランドと、イギリスは、物の考え方において全くかけ離れており、やはり、アイルランド人であるワイルドにとって、イギリス人の真面目さが最も滑稽に映るのである。イギリス人俳優によって真面目に演じられた劇は、イギリス人が良いことと思っている「真面目さ」を笑いの種にしており、イギリス人である観客は自分たちも笑っている事に気づき、驚かされる。つまり、ワイルドは、彼の手法によって、批判を直接的なものから間接的なものに、一つの価値観から別の価値観にずらしていき、観客に、笑いのうちにそれを受容させる事を意図した。そして、観客は、はぐらかされている事に後で気づかされるのである。

他方、アイルランド人であるワイルドは、イギリス人の本質を客観的に観察する事が出来るとともに、イギリスに拠点を置く事によって、アイルランドも鳥瞰視する事が出来た。Terry Eagleton が述べているように、感情移入と疎外の、緊迫を孕んだ結びつきによって、部外者は、自分が新たに見出した文化に批判的な視線を投げかける。そうした人は、土着の民よりも多くを見る事が出来る。そして、その文化に対して、相対化あるいは全体化を図る視点を導入する事が出来るのである。<sup>16</sup>

ワイルドは、英国において、「イギリス人よりもイギリス的」と許される人物にはなるものの、常に疎外感を持ち続ける。彼は、この不安定な自己同一性によって、新たな視点を生み出し、イギリスを観察する事が出来た。ワイルドは、アングロアイリッシュ作家であった事、後に、自己

を破滅に追い込んだホモセクシャルの疑いがあった事などから、全てにおいて、弱者たる女性に共感し、権力を振りかざす男性＝イギリスに、批判の目を向けた。彼の作品においては、このようなワイルドのアイルランド的イギリス観は女性に託されており、また、これらの女性の中に、ワイルドの隠された Irishness を発見する事が出来るのだ。

\*本稿は日本英文学会中部支部第49回大会（1997年10月11日、中京大学）での口頭発表に加筆修正したものである。

## 注

- 1 平井博『オスカー・ワイルドの生涯』（松柏社、1973）7.
- 2 Declan Kiberd, *Men and Feminism in Modern Literature*. (London : Macmillan, 1985), 32.
- 3 Oscar Wilde, *An Ideal Husband in Complete Works of Oscar Wilde*. (London and Glasgow : Collins, 1984), 500.
- 4 Wilde, *An Ideal Husband*. 502.
- 5 山田勝『世紀末とダンディズムーオスカーワイルド研究』（創元社、1985）265.
- 6 Wilde, *An Ideal Husband*. 541.
- 7 Wilde, *An Ideal Husband*. 483.
- 8 Wilde, *An Ideal Husband*. 551.
- 9 Richard D. McGhee, *Marriage, Duty & Desire in Victorian Poetry and Drama*. (Lawrence : The Regents of Kansas, 1980), 291.
- 10 Katharine Worth, *Oscar Wilde*. (London : Macmillan, 1983), 149.
- 11 Chris Baldick, *The Concise Oxford Dictionary of Literary Terms*. (Oxford and New York : Oxford Univ. Press, 1990), 40.
- 12 George Bernard Shaw, "An Ideal Husband" Rev. of *Saturday Review* 12 Jan. 1895, in Karl Beckson ed., *Oscar Wilde*. (London : Routledge & Kegan Paul, 1970), 176.
- 13 Vivian Mercier, *The Irish Comic Tradition*. (Oxford : The Clarendon Press, 1962), 79.
- 14 Declan Kiberd, *Inventing Ireland*. (London : Jonathan Cape, 1995), 35.
- 15 G. B. Shaw, 177.
- 16 テリー・イーグルトン、鈴木聡訳『表象のアイルランド』（紀伊国屋書店、1997）を参照。  
原書は Terry Eagleton, *Heathcliff and the Great Hunger : Studies in Irish Culture*. (London and New York : Verso, 1995).